

板橋時代の国立極地研究所の映像記録について

神田 啓史（極地研究所）

極地研究所の神田と申します。

極地研には広報室があり、その中でアーカイブスを収集して保存してあるというだけで、今後それらの資料をどうするかなどの具体的予定はありません。現在の極地研にはアーカイブスを専門的に扱う部署がない、あるいは所轄が不明瞭になっているのが実情です。

本日は現況を中心に報告させていただきます。



この写真は1957年1月29日、南極観測第1次隊がオングル島に基地をつくったときのものです。極地研は南極観測とは切っても切り離せない関係があり、南極観測から生まれた研究所であるといってもいいでしょう。

ここで極地研の歴史をふりかえってみます。昭和36年5月に日本学術会議が政府に対して、南極地域観測の実施によって得られた資料の整理、保管、研究等を行うため極地研究所を設置することを勧告しています。当時は研究よりも資料の保管が目的でした。その後、国立科学博物館の「極地課」、「極地部」、「極地研究部」、「極地研究センター」として一貫して極地資料の収集、保存に力を注いできました。その後、研究所設立の最初の勧告から12年後の昭和48年9月に国立大学共同利用機関として国立極地研究所が設立されました。以来、総合研究大学院大学の構成研究所、大学共同利用法人研究所、情報・システム研究機構研究所として、それぞれの立場で歴史を刻んできましたが、国立極地研究所はアーカイブス事業を真っ先に取り組んできた歴史を持つ研究機関といえると思います。

右は、現在一般資料室に保管されている当時の「国立科学博物館極地部分室」の看板の写真です。

昭和48年(1973年)9月29日、国立極地研究所が板橋の加賀地区にあった第二陸軍造兵廠の建物に設置され、36年の歳月を経て、平成21年4月より立川移転が開始します。これで国立極地研究所の板橋時代が終わり、歴史的な一幕を閉じる訳ですが、板橋時代の資料を収集、選別し、目録作成して永く保存することは、国立極地研究所の研究に対する歴史的評価と社会に対する説明責任を果たすことにもつながります。



いままで何をどのように資料を収集・保存してきたかについての話をいたします。

1. 映画



南極観測隊は今年度で 50 次隊。途中 3 年ほどお休みもありましたが、およそ 50 年の歴史を刻んできました。観測隊に 16 ミリフィルムカメラを貸与し、公式記録として隊次ごとの記録をとって制作した映画が 50 本あります（日本語版 38 本、英語版 12 本）。映像資料は貴重な記録データとして保存管理しています。これら 50 本の映画を制作する過程で、未使用の映画フィルムやビデオなどの資料が収集・保管されてきました。よく使用されているものとして、「南極観測」、「南極の詩」、「白い大陸からのメッセージ」などがあります。上記の日本語版に英語のナレーションを入れた映画は全てデジタル化を終了し、DVD により貸出しを行っています。また、映画フィルムについては温度管理を施した一般資料室に保管しています。



研究所ができるとき、研究系と資料系の 2 つの組織に分けられました。それぞれ研究主幹、資料主幹士官、研究士官がおりまして、資料

第 I 部 本研究課題の成果報告

系は研究系よりは小さいですけれども当時から一般資料部門がありました。

今年で研究所が設立されて 36 年が経ちました。私自身が着任してからは 34 年になります。今度、移転前の極地研の映像をとるといふことで、プロのカメラマンと久しぶりにフィルムが収蔵してある資料室に入ってみると、酢酸の臭いがする、これは危ないぞ、と言われました。プロがにおいを嗅ぐとどの程度フィルムの劣化が進んでいるのかわかるということに私はとても驚きました。これらが最終的に



つくられた映画のオリジナルと編集した過程で残ったフィルムなどが保存されています。これらの映画が 50 本ほどあります。それらをきちんと保存していくために、みなさんといろいろ相談しつつ進めさせていただければと思っております。



映画は最終的に 50 枚の DVD に登録され、保管されております。各映画は保存用・貸出用と分けてあり、利用されている状況にあります。

2. ビデオ

ビデオテープについては、総本数 252 本（平成 14 年度まで）を一般資料室で保管しています。

これらのビデオテープは D2、1 インチ、U マチック、VHS、ベータ、ベータカム等多岐にわたる種類の媒体で残されているため、今後、これらの映像の管理方法について検討が必要とされております。

また、平成 14 年度以降に集められたビデオが既に数百本以上あり、まだまだ分類作業に手が回らない状況となっております。



これは数十本ある U マチックビデオの写真であり、映画フィルムをできるだけよい画像のものにおきかえようとした所産です。

すべての媒体の記録を保存していく予定であります。

第 I 部 本研究課題の成果報告

3. スライド写真

スライド写真は観測隊の貴重な資料として隊次別・種類別に収集・整理されております。公式記録用として各観測隊に貸与したカメラやデジタルカメラによりドームふじ基地関係の約 1000 枚の写真を含む、多くのスライドが、隊次別、種類別（分別）に収集、整理され、公式記録として保管されています。現在はデジタル化し広報室で閲覧可能となっております。平成 19 年度より、約 18000 件のスライドが選別できる検索システムが完成しました。ただし、インターネットによる利用等のサービスは行っておりません。



観測第 1 次隊から第 33 次隊まで集め、すべて整理されてあります。外国基地のスライドなども収集してあります。



検索システムはキーワードで検索し、必要なものを取り出していくという方法で利用しておりますが、これは広報室においてあります。将来的にはインターネットで閲覧・利用していただくという方向へ向け、準備を行っております。システムはすでに構築されているのですが、著作権の問題等があり、まだ公開していないといった状況です。

4. パネル

パネルの収集・保管については、あまり他の分野では例がないかもしれません。平成8年3月の時点で965枚の写真パネルを管理していましたが、一般資料室のスペースが狭隘であること、木製パネルよりアルミパネルが管理しやすいことを考え、平成16年度にデジタル化、アルミパネル化をしてそのほとんどを廃棄いたしました。残っているパネルは立てかけて保存されております。



ところがパネル化された写真には大変貴重なものもあり、左下の写真が一例ですが、いわゆるもとのネガが存在しないものも多々あります。そういったものは写真そのものが重要となってくるため、それをまた写真に撮り、保存するといったことを行っております。木製パネルのものは、写真をはがし、一部はスチールに貼り、他はまるめて保存しております。



第 I 部 本研究課題の成果報告

アルミパネルについてはこれまでの貸出しの状況を考慮して 40 枚 1 組のセット、より詳しい説明を入れた 100 枚セットの 2 種を基本的に貸し出しています。これは個別貸出しによるパネルの散逸を防ぐことと、南極観測事業の効率的な紹介ができるパネルをセットにして貸出すことで、事務の効率化にも繋がっています。

5. 古文書

1957 年に南極に昭和基地が建設された 45 年前の 1912 年、白瀬中尉率いる南極大陸に到達した当時の古文書、アーカイブスも保管してあります。秋田県の白瀬記念館には極地研と同様いろいろな資料が保存されています。ほか、極地研には初期の観測記録などの歴史的資料、永田武初代所長の個人資料などもあります。

保存資料一覧：

- ・ 白瀬中尉関連資料
- ・ 南極観測開始当時の資料
- ・ 昭和基地建設資料
- ・ 観測船宗谷関連資料
- ・ 南極観測再開の資料
- ・ 砕氷船ふじ関連資料
- ・ 砕氷船しらせ関連資料
- ・ 永田武・村山雅美個人資料
- ・ 極地研設立当時の資料



これらの資料の収集・整理をすすめているといった状況です。

第 1 次隊の宗谷時代の資料など、大変貴重と思われます。永田先生の資料はかなり整理がすすんでおり、図書室などに保存されておりますが、他のものはまだ箱に入ったままの状態になっているものもあります。過去の ATCM, CSA 国際会議の資料などいろいろな集めている次第です。

第 I 部 本研究課題の成果報告

梱包

教員（個人、グループセンター）、事務員（部署）ごとにあらかじめ用意されたアーカイブス資料内容（たとえば、国際プロジェクト関連、旧研究系・資料系関連、共同研究関連、大学院関連、図書室関連、南極観測関連等）を明示したラベルを貼ったダンボールにアーカイブス資料を入れ、満杯になったらその 2、その 3 と追加していく。各個人、センター、部署名を明記する。

整理、選別作業

今回は立川移転に伴う文書・物品のアーカイブスに関する検討を目的として、検討グループを立ち上げ、持ち運んだ資料は何らかの部屋、倉庫に収納する予定であるが、それらの資料からアーカイブスを調査、選別する作業は、別途、検討グループ等を立ち上げて対応したい。

アーカイブスは極地研、研究所だけのものではありません。現在、全国に約 2000 名ほどの隊員が南極 OB 会に属しています。これらの方々には年齢を増すことにアーカイブスへの興味も増していかれる。それを利用していただき、南極 OB 会による南極アーカイブス資料の収集事業の基本計画といったものをたてました。これは今、OB 会の最も重要な事業として取り組まれています。

総研大の監事である渡辺興亜元所長がとてもアーカイブスに興味を持っておられ、働きかけをしてくださっております。

南極 OB 会は OB 会なりの制度をつくり、平成 20 年 10 月より、南極観測 50 周年記念事業の一環として、南極観測に関するアーカイブス資料収集事業を開始しました。事業は南極 OB 会アーカイブス委員会の主導のもとに実施されています。

南極 OB 会アーカイブス委員会の主な受け入れ資料としては：

- ・ 隊次公用、隊員個人の私的資料
- ・ 隊次を超えた観測事業資料
- ・ 物故 OB 会員からの一括寄贈資料

板橋時代の国立極地研究所の映像記録について（神田）

などがあります。また、収集している資料の種類は：

- ・ 記録資料（計画書、報告書、一般メモ、各種事業実施記録文書類）、学術・設営文献、地図、設計図、スケッチ、音声テープ
- ・ 映像資料（写真、ネガ、スライド、映画フィルム、DVD）

などがあげられます。

また、提供資料の受け入れに関する基本原則として以下の項目があります：

1. 資料の提供に関わる経費は、原則として提供者の負担とする。
2. 提供を受けた資料の所有権はアーカイブス委員会に属し、重複資料など不要と判断された資料の破棄はアーカイブス委員会に一任されるものとする。原則としては提供者に返還しない。
3. アーカイブス資料の台帳は、OB 会員に対し公開される。
4. アーカイブス資料は原則として非公開とし、閲覧はアーカイブス委員会の許可を要する。
5. アーカイブス資料に基づく二次資料の作成は、アーカイブス委員会の認可を要し、作成した資料はアーカイブス資料として保存する。二次資料の著作権は原則としてアーカイブス委員会に属する。

外部から見ると、あまりにも素人的かもしれませんが、OB 会なりのやり方で進めております。

最終的に、集められた提供資料・アーカイブス資料は極地研に移管される方向で動きだしましたが、現在は市川市鬼高にあるアイ・エス・エス（ISS）鬼高センターの文書保管サービスと契約・委託して管理・保管を実施しています。空調などが完備されているところです。

以上、現状はアーカイブスをできる限り収集しているといった状態です。

第 I 部 本研究課題の成果報告

最後に、私は、アーカイブスは広報とは違うものであると思っています。広報ではアーカイブスを使用することはあるけれども、現実の広報活動に追われなかなかアーカイブスまで手が回らない現状です。気がついてみたら、貴重な資料が酢の臭いにまみれ、カビが生えて、置き去りにされているといった状態になります。そういった状況はとても好ましくないと思われますので、アーカイブス専門の室をつくるなど、きちんと組織として作っていかないとなかなか管理できてはいけないうちであろうと考えております。

ましてや極地研は、総研大の中でも重要な資料に基づいて研究を行っている研究所であると思われますので、研究所の職員には自らそういった研究を行っているということをより一層、自覚・理解していただきたいと思っています。

【質疑応答】

小沼：意見を述べさせていただきます。OB会の定めている資料提供の原則の項目のひとつとして、「資料の提供に関わる経費は、原則として提供者の負担とする」といったものがありました。本人が寄贈する際には内容の価値をわかっているし、また昔属していたところだということの問題はないと思うのですが、たとえば亡くなられた方の遺族からいただく場合、経済的・人的負担までして資料を寄贈してもらおうことができるのかといった面から考えると、資料が入りにくくなる可能性が高くなるのではないのでしょうか。面倒であれば、誰かがそこへ出向いて箱詰めを手伝ったりすれば若干助かるし、配送料なども研究所で負担するとなれば、遺族の側からすると寄贈をしやすくなるので、検討されてはいかがでしょうか。

神田：まさしくそういった問題が現実にあります。「原則として」ということで定められているのですが、まずはOB会へそのような話を持ってきていただいた上で決めさせていただいています。もちろんOB会の担当の者は、そういったお話をいただいた際には実際に伺わせていただき、その上で調整させていただいております。やはり、お金がないといったこともひとつの問題となっています。これは50周年の記念事業ということでOB会は若干の財源を用意してくれたのですが、これは保管倉庫に預けたりして使っているため、すべての資料寄贈に対して経費をかけるということとは不可能である、ということです。あくまでもOB会と相談していただければかなり対応をしていただけるのではないかと思います。

小沼：OB会だけでなく研究所が考えるべき問題なのでしょうね。

神田：そうですね。OB会も非常に深刻に物事を考えています。ただ、南極OBであっても研究所の現役職員OBだとは思っておりません。私について言えば（意識的には現役とOBの中間ぐらいでしょうか）、南極についてはまだ、現役と思っておりますので、OBとは考えていません。ですから、研究所はOB会に対しては

第 I 部 本研究課題の成果報告

若干、他人事、といった所があるかもしれませんが。それも定年になったあたりからじわじわとアーカイブスについて興味を持っていくようです。第 1、2 次隊の方々とお話をする時にはいつでも、オーラルヒストリーとでも言うのでしょうか、非常に大事な瞬間であると感じています。いつも録音機を持っていたほうがよいのかな、と思ったりもいたします。

村上：岡崎研究所にも南極観測所に行ったことのある経験者がおりました。研究者でなく施設課の方です。そういった方々も結構、南極での生活についてのスライド写真などを持っておられ、20 年ほど前にセミナーでお話ししていただいたことがあります。研究者以外の OB の方々からも資料を集めることができれば、写真などは特にその時代を反映しているのでよい資料になるのではないかと思います。

神田：OB の方々によるのですが、それぞれの方に連絡が届くような（呼びかけの）システムが必要だと思われれます。それから、隊次ごとの連携はとても強いと感じておりますので、隊次ごとにアーカイブスを、呼びかけていくこともそのひとつです。

村上：生理研でも毎年共同研究を募り、その時その時の研究グループができあがっているのですが、研究が終わると解散していきます。それらの資料がどう残るのかということで、連携ということの意味合いも含めて、資料室が存在しております。そこら辺がこれからの大きな課題であると考えております。